

創業 30 周年を迎え、環境活動への取り組みも 15 年目に オルビス、本社ロビーに「甲州市・オルビスの森」の間伐材を活用 人と自然の共生を体感できる空間に

ポーラ・オルビスグループのオルビス株式会社(本社:東京都品川区、社長:阿部嘉文)は、山梨県甲州市に広がる荒廃した森林を里山として再生する「甲州市・オルビスの森」プロジェクトの一環として、10月12日より、オルビスの本社ロビーに、里山で伐採された間伐材を利用したベンチやマガジンラックを設置。「甲州市・オルビスの森」を、社員やオフィスを訪れる方々に身近に感じてもらえるよう「プチオルビスの森」として再現しました。さらに、11月20日に空間演出を手がける Cherry Radish (チェリーラディッシュ) (<https://ameblo.jp/cherryradish/>)による装飾が行われ、人と自然の共生を体感できる空間を作りました。

オルビスの環境活動について

オルビスは1987年の創業当時より、事業活動において様々な環境負荷低減の取り組みを行っています。2002年からは公益財団法人オイスカ、行政と協働で、山梨県内における環境保全活動を開始。これまでに甲府市「武田の杜」の森林整備(2002~2013年)、鳴沢村富士山麓での「富士山の森づくり」プロジェクト(2007年~)、「甲州市・オルビスの森」プロジェクト(2012年~)を実施し、毎年春と夏の年2回、多くの従業員がボランティアとして参加。これらの継続的な取り組みに対して、2006年、2014年の2度にわたり山梨県知事より感謝状が授与されています。



オルビス本社ロビー「プチオルビスの森」

今年、オルビス創業30周年を迎え、環境活動も15年目という節目のため、上記活動に加え、従業員の環境への意識向上を狙い、全社員を対象にした「エコ検定クイズラリー」や、地球環境保全のためのアイデア公募、お客さまへ間伐材を使ったつみきのプレゼントなどを実施しました。海外においても、同じくオイスカの「子供の森」計画に賛同し、2002年よりフィジー共和国への支援を開始し、現在も継続しています。

「甲州市・オルビスの森」について

甲州市塩山上小田原の広さ約100ha(東京ドーム約21個分の広さ※)の市有林。公益財団法人オイスカの仲介により、オルビスと甲州市が同地の整備、保全に向けた協定を2011年1月31日に締結しました。オルビスは2012年から植林や下草刈り、2014年より間伐などの整備を行い、人と森をつなぐ里山として再生させるプロジェクトを推進。2021年までに里山を再生し、2022年以降は人と自然との共生を目指し、地域と連携しながら、「甲州市・オルビスの森」や、そこで採れた間伐材の有効活用に取り組みます。

※東京ドームの敷地面積を46,755㎡として換算

間伐材活用の意義

間伐とは、込みすぎた立ち木を一部抜き刈りすることで、十分な光や栄養が一本一本の木々に行き渡るようにする目的で行われ、森林全体を育てていくために、大変重要なメンテナンス作業の一つです。また、間伐した材を活用せずに腐らせてしまうとCO2の放出につながりますが、ベンチやチップなどに活用し固定化することで、CO2放出を防ぐことができます。

JR東日本と甲州市は、2017年4月28日よりリニューアルオープンしたJR塩山駅構内に「甲州市・オルビスの森」の間伐材を利用したベンチを設置しています。

オルビスでは環境への取り組みを専用サイトでご紹介しています。
是非こちらもご覧ください。

<http://corp.orbis.co.jp/csreco/>

【本件に関するお問い合わせ先】 (株) ポーラ・オルビスホールディングス コーポレートコミュニケーション室
Tel 03-3563-5540 / Mail webmaster@po-holdings.co.jp